

パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、
210ページに見られるテキストの修正・放棄について
—— 断章「気晴らし」(Divertissement)の成立をめぐる秘密の解明に向けて ——

湊 野 正 満

要 旨

『パンセ』断章「気晴らし」のパスカル自筆の草稿第2枚目、第3枚目には、多くの加筆・修正のなされたテキストが存在する。小論ではこの2枚の紙、とりわけ、加筆・修正され、後に放棄されてしまった20行あまりの文章について考察する。これはピュロス王のエピソードに基づいて書かれたものである。なぜこのように長く、重要な文章が破棄されたのであろうか。そのつづきに書かれている文章を読み、その文章と破棄された文章を比較すると、そこには同じ考え、同じ構造が見られる。そこでパスカルは前の文を破棄して、次の文に書き換えたかと我々は結論する。ここには、新しい研究の可能性が存在する。断章「気晴らし」は、そのタイトルとして、はじめに「人間の悲惨」と書かれ、のちに、「気晴らし」と修正されているが、断章「気晴らし」の草稿の下に、「人間の悲惨」というタイトルのもとに執筆されたまだ誰も読んだことのない新しい断章(初稿)が潜んでいる可能性があるのだ。我々は断章「気晴らし」の自筆の草稿をさらに本格的に研究する必要があるのではないか。

キーワード：パスカル, Pascal；『パンセ』, “Pensées”；断章「気晴らし」, “Divertissement”；自筆草稿, autograph manuscript；複読法, “Double lecture” of M. Yoichi MAEDA (named by Pr. Jean Mesnard)

一般的に短い文章が多いパスカルの『パンセ』断章の中でも、とりわけ長く、思想的にも重要な断章「気晴らし」は、難解とされ、充分な解明がなされていない。この原因の一つは、私見によれば、断章「気晴らし」の草稿が未だ完全には読み解けていないことにある。

さらに、最近の50年間、フランス本国でもこの問題に取り組んだ学者はいたが、この複雑な草稿の成立を解明できたものはいない。筆者もいまから30年ほど前にいちどこの草稿について調べ、仮説を提出したことがある¹⁾。そこではしっかりとした論拠を示すことができず、それは単に仮説に終わった。

数年まえに、再びこの草稿を取り上げ調べてみると、さらに詳しく調べてみる必要を感じた。以前に指摘できなかった点にも気づき、草稿をより詳しく解析して、この断章の成立過程を説明できるのではないかと考えるようになった。さいわい2007年度、2008年度と京都産業大学の総合研究支援制度の助成金を受けることができ、ソルボンヌ大学のフィリップ・セリエ教授²⁾の指導³⁾のもと、この草稿の成立過程の本格的解明に取り組んで来ている。

小論の目的は、断章「気晴らし」の成立過程を一気に解明しようとするものではなく、この難問を解明するための糸口をつかむために、断章「気晴らし」の草稿にみられる第1の難問を

突破することにある。すなわち、Recueil Original (『パンセ』草稿原稿) の210ページから209ページにかけて存在する複数の修正について取り上げ、実はこれらの修正がそれぞれ相互に関連した一連の修正であり、これらの修正全体が一つの意図、一つの体系的な視点の下に行われた大改訂の跡であることを明らかにして、今後、断章「気晴らし」の草稿の本格的な調査が必要であることを示すことにある。

ここでいくつか前もって説明を加えておきたい。いま「Recueil Original の210ページから209ページにかけて存在する複数の修正」と書いた。なぜ「209ページから210ページにかけて」ではないのか、これには若干の説明が必要であろう。

実はこのページ付けは、草稿そのもののページではなく、『パンセ』の草稿が貼り付けられているアルバムのページなのである。そのため、断章「気晴らし」の草稿がいろいろな場所にバラバラに存在するのである。

パスカルは5枚の紙の表側だけに断章「気晴らし」のテキストを書き込んだ。テキストの始まりは139ページである。パスカルは139ページの冒頭に《Misère de l'homme》⁴⁾とタイトルを書き込んで次の行から文章を書き始めている。このページの終わりには《L'unique bien des hommes consiste donc à être divertis de penser》⁵⁾と書き込まれ、その続きの文が210ページ冒頭に《à leur condition ou par une occupation qui les en détourne, ou par quelque passion agréable (qui) Et nouvelle qui les occupe, ou (le) par le Jeu, la danse, quelque spectacle attachant, Et enfin par ce qu'on appelle divertissement.》と見いだせる。

このことからタイトル《Misère de l'homme》のもとに、139ページに書き始められた文章は、あたらしい紙である210ページに書きつがれていったと言ってよい。

こんどは、210ページの最下段を見てみよう。

Le conseil qu'on donnait à Pyrrhus de vivre en repos qu'il allait chercher par tant de fatigues, recevait bien des difficultés (~~Et ne fut pas dig~~) Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux, (~~dire à Vn~~) C'est lui conseiller

上の文章は不完全で、その続きは3枚目の紙に書き継がれている。かりに紙が2枚であれば1枚目にタイトルがあるため、1枚目と2枚目の区別が容易につき、ことさら注意を払う必要はない。しかし、今度は3枚目の紙になるのでそのつながり具合をはっきりさせる必要がある。このため、209ページの冒頭に前ページの最後の語 (conseiller) を繰り返す。そしてさらに一見してわかるように送り記号 (Signe de renvoi) をつけることにする。それが210ページ右下下部右欄外と209ページ左最上部左欄外にひときわ大きく記されている《A》の文字である。なお、この送り記号Aは、上からぬりつぶされ、放棄されている。

209ページ冒頭の文は、前ページには書ききれなかった文の続きである。

conseiller d'avoir une condition toute heureuse et laquelle il puisse considérer sans y trouver sujet d'affliction. Ce n'est donc pas entendre la nature.

Aussi les hommes qui sentent naturellement leur condition n'évitent rien tant que le repos, il n'y a rien qu'ils ne fassent pour chercher le trouble. Ce n'est pas qu'ils n'aient un instinct qui leur fait connaître que le vrai béatitude

このように文が続けて書かれているので、断章「気晴らし」の書かれている5枚の紙のうち、小論中で取り上げる3枚の紙片は139ページ、210ページ、209ページの順に使用されていったことは明らかである。

第1部

小論で取り上げるのはこのうち210ページから209ページにかけて存在する数カ所のテキスト(10-13-14)の放棄に関してである。ここは横線、縦線、送り記号と言った複数の方法で、いくつもの放棄がなされている。この放棄の順番を明らかにしながら、放棄の意味を考えていこう。なお、草稿上のテキストについて、便宜的に番号⁶⁾をつけて、その場所を明示する事にしたい。ただし、テキストに付けられた番号は、草稿上の場所・位置を特定するためのものであり、番号によって示されたテキストは必ずしも段落としてのまとまりを持っているわけではない。

まず、210ページの下から5、6行目(テキスト10)を見てみよう。
草稿上のテキストを、綴り、改行、句読点を含め、草稿通りそのまま引用していこう。

《横線①と縦線②によるテキストの放棄》

detournent, mais la Chasse n^s empes en garantit. *Et Ainsy* A

texte10

on philosophe sottement en disant que les Roys ne sont pas ①

heureux par ce que les Choses qu'ils possèdent ne ①

この引用1行目行末の《*Et Ainsy A*》はあとからの加筆である。従って、この部分の初稿の段階では《en garantit.》に続いて、2行目《On philosophe sottement》以下の文が書かれた。

引用2行目冒頭からの文に注目しよう。《On philosophe sottement en disant que les rois ne sont pas heureux, parce que les choses qu'ils possèdent ne》この文が完成していないことから、パスカルがこの文を《qu'ils possèdent ne》まで書いたところで中断し、横線①で放棄したのであろう。さらに、縦線②により、この2行にわたる文の放棄をより明確にしたのである。縦線群②による放棄はただちに行われたものと思われるが、この理由はあとで述べる⁷⁾。

この中断と放棄については、その内容から、次のように言ってもいいだろう。作者は《On

philosophe sottement en disant que les rois ne sont pas heureux, parce que les choses qu'ils possèdent ne》まで書いたところで、この文を削除し、この話題をピュロス王のエピソード（次項参照）を使って具体的に書くことに考えを変えた。すなわち《Le conseil qu'on donnoit à Pyrrhus de vivre en repos qu'il allait chercher par tant de fatigues, recevait bien des difficultés.》と書き始める。

同じテキスト10にもう一つ縦線群③による放棄がある。

《縦線③によるテキストの放棄》

prendre le

Le conseil (d) qu'on donnoit a pyrrhus de ~~vivre en~~ repos qu JI alloit

chercher par tant de fatigues, recevoit bien des Difficultez ~~Et ne~~

soit

~~fut pas dit~~ Dire à Vn homme qu JI ~~vivre en~~ repos, C'est luy

dire qu JI Vive heureux, ~~dire à Vn~~ C'est luy conseiller

③ ③ ③ ③ (A)

ピュロス王のエピソードはモンテーニュの『エッセー』第1巻42章⁸⁾に取り上げられ、また16世紀に仏訳されたモンテーニュの愛読書プルタルコス『英雄伝』⁹⁾（「ピュロス王」篇）にも見られることは諸版の指摘するところであり、断章「気晴らし」本文中に名前こそでてこないが、ピュロス王に助言するものはキネアスである。ピュロス王がイタリア遠征を企てたときに、キネアスは王の野心のむなしさを悟らせるためにその目的を尋ねると、王は、最終的に世界を支配下に治めてからゆっくり休んで、心ゆくまで平安に暮らすのだと答えた。キネアスはピュロス王に、なぜ今すぐにそうしないのかと尋ねた。キネアスの助言は、ピュロス王の最終目的がゆっくり休んで、心ゆくまで平安に暮らすことであるのなら、危険な思いをして、戦争などをせずに、いますぐにゆっくり休んで、心ゆくまで平安に暮らせばよいというものである。

このキネアスのピュロス王への助言を、パスカルは「多数の困難にぶつかった」と評して批判し、次にその根拠を記していく。

縦線群③による放棄を考えていこう。《Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux, c'est lui conseiller》と、ここまで書いてパスカルは紙の最下段にたどり着いてしまう。ここに彼が送り記号Aを記入することはすでに述べた。

パスカルは3枚目の紙（209ページ）を取り出すとその最上部左余白に同じく送り記号Aを記入する。このような送り記号の挿入や前ページ最後の語を次ページ冒頭に繰り返すと言う方

法は、むしろ筆写生 (Copiste, Cf. 第1写本, 第2写本¹⁰ etc) の職業的技術 (錯簡を避けるためなど) に属する技法である。こういった技術を使用することは、パスカルが自分の書いたものを、後日推敲する際に、間違いなく再構成できるように配慮したためと考えられる。裏返せば、文章にあとから修正の手を徹底的に加えていくことへの作者の自覚の表れとも考えられる。

ともあれ、ここでパスカルは2枚目の最下段に書きかけている文の続き (テキスト13) を、第3枚目最上段に書き記した。

《conseiller d'avoir une condition toutes heureuse et *la quelle* il puisse considerer sans y trouver sujet d'affliction, aussi les hommes qui sentent naturellement leur condition n'évitent rien tant que le repos, il n'y a rien qu'ils ne fassent pour chercher le trouble》

この文も縦線で放棄されてしまうのであるが、前ページから引き続いている文であることから、209ページ冒頭の2つのテキスト (13, 14) の放棄は縦線群③による放棄と同時でなければならない。

《線③～⑩によるテキストの放棄》

さて、209ページ冒頭のテキスト13, 14には数多く放棄の手が加わっている。これを整理してみよう。

(A) **texte13** ④ conseiller d'auoir une condition toutes heureuse et *laquelle* Il puisse
a loisir considerer sans y trouuer sujet d affliction, Est luy consei ⑥

texte19 (circled) La Vanité
Le plaisir de le monstrier aux autres

⑤ Ce n'est donc pas entendre la Nature ⑦
aussi les hommes (sen) qui sentent Naturellem^t leur condition ⑧
n euitent rien tant que le repos, Il n y a rien qu Jls ne fassent p^r chercher
le trouble, ce n'est pas qu Jls n ayent Vn Instinct qui leur ⑨
fait connoistre que le Vraye beatitude ⑩ ⑨

texte14 Ainsi on se prend mal pour les blasmer mais on a quelque raison en ce que
Les hommes eux leur faute n'est pas en ce qu'ils recherchent (de) le
Diuertissement empesch Et le tumulte s ils ne le chercheint que comme
Vn diuertissement mais le mal est qu ils ne le recherchent comme si

La possession Des choses qu'ils recherchent les deuoit rendre veritablement heureux
Et c est en quoy on a raison d accuser leur recherche de uanité de sorte
qu'en tout cela et ceus qui blasment et ceus qui sont blasmes n'entendent

(A) **texte15** Et Ainsy ⑪ La Vritable nature de l'homme Car ⑪ quand on leur reproche qu Jls
recherchent avec tant d ardeur ne scauroit les satisfaire, s Jls repondroyent comme Jls

図1 《線③～⑩によるテキストの放棄の説明図》

横線⑥による放棄は、《 C'est lui conseil 》と文が完成してないことから、書きかけて、すぐに放棄されたものである。

横線⑨で放棄された2行《 ce n'est pas qu'ils n'aient un instinct qui leur fait connaître que le vrai béatitude 》は、あとでテキスト16として再登場し、全面的に展開される思想であるが、ここでは、文が中断されて、完成されていないので、書きかけられて途中で放棄されたものと判断できる。

横線⑦は、《 Ce n'est donc pas entendre la Nature 》を放棄したものである。この文は完成されているので、注意深く判断しなければならない。ここで直前のピュロス王に対するキネアスの助言に対して、パスカルは《 Ce n'est donc pas entendre la Nature 》と評した。いってみれば、これはキネアスの助言に対する作者の結論である。ところが、その次の3行はキネアスの助言に対する反論である。このことから判断して、《 Ce n'est donc pas entendre la Nature 》と結論を出そうとしたが、先に反論を書くことにして、この1行を横線⑦で消したと言っているであろう。

いや、先に結論を述べて、あとから説明を加えたのかもしれないと反論する人がいるかもしれない。

しかし、パスカルは次のテキスト14でも、このエピソードに対する考察を続ける。テキスト14は、ピュロス王の取ろうとしていた行動に対する評釈である。ピュロス王の取ろうとしていた行動そのものは間違いではないが、その目的が過ちであるといつて、ピュロス王の行動もその目的において批判する。そしてテキスト14の最後の文で、《 **ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme** 》と両者を批判し、「真理は我のみにあり」と強く主張している。

テキスト13ではキネアスを、14ではピュロス王を批判していることを考えあわせると、テキスト13の時点で結論を急いでしまう必要はない。いや、むしろテキスト13にこの1行《 Ce n'est donc pas entendre la Nature 》が存在しているのは、テキスト14が書かれることはない。すなわち、この1行は書いてただちに横線⑦で消され、放棄されたものと考えるのが妥当である。

縦線④はこの部分全体（テキスト13、14）を一気に放棄するのに使われているので、最後に引かれたものと言える。なぜなら、ひとは放棄したテキストを修正はしないものだから。

テキスト13は、④、⑥、⑦、⑨以外に⑤、⑧によっても放棄がなされている。⑤と⑧の関係は、⑧で放棄された部分が縦線⑤で放棄されるテキスト13全体に含まれるので、⑧、⑤の順に放棄されていったのも確かである。

縦線⑤による放棄に関して、テキスト13冒頭の文が途中から始まっており、その前半は210ページ最後の2行に存在し、しかも縦線群③で放棄されている。したがってこの一つの文に属する2つの部分（前半と後半）の放棄は同時でなければならないことはすでに述べた。4本の縦線群③による放棄と縦線⑤による放棄は同時なのである。

ここでテキスト14を再度検討してみよう。このテキストは特殊である。直前のテキスト13までは、パスカルの筆跡である。テキスト14だけ他の人の手になり、次のテキスト15からは、またパスカルの手に戻る。こういうことは『パンセ』草稿には時に見られることである。本断章にも今回は扱わないが、4枚目(217ページ)は、ほぼ全文、別の人の手によるものである。

ここには長い縦棒が2本(④, ⑩)引かれており、このテキストも全部放棄されている。⑩によるテキスト14の放棄は⑧, ⑤によるテキスト13の放棄とどちらが先であろうか。

テキスト14はテキスト13の続きであるから、テキスト13が生きていることが前提なので、④⑤⑧⑩の縦線による放棄の順番は⑩, ⑧, ⑤, ④と推定される。しかも、縦線④による放棄はテキスト14のみならずテキスト13の放棄をも意味している。上で説明したように、テキスト13はテキスト10の後半の文の続きであることからテキスト10の一部(4本の縦線③で放棄されている部分)の放棄も引き起こしている。従って、縦線④を引くことは、ピュロス王に関する一連の議論を放棄することを意味している。

このことを、明確に示している事実がある。

パスカルは、ピュロス王の一連の議論を放棄したあとに、はじめには単にページの送り記号として使った2つのA(210ページ最下段から209ページ最上段への送り記号)を、今度はこのピュロス王のエピソードの直前(テキスト9の終わり)と209ページのテキスト14の最終行の行頭に付け、ピュロス王のエピソードとそのコメントの部分を一気に放棄してしまう。

このプロセスをここでまとめてみよう。横線⑪によるテキスト14の細部(最後の文の一部)の修正から始まって、縦線⑪によるテキスト14全体の放棄、さらに上について縦線⑧によるテキスト13の後半、縦線⑩によるテキスト13全体の放棄、そして、確認するかのように今放棄したテキスト13, 14全体の縦線④による放棄。縦線⑤によるテキスト13の放棄にあわせて、縦線③による前ページ最下部のテキスト10の放棄。そしてピュロス王のエピソードの直前にある棒線①, ②によってすでにはじめから放棄されている未完の文の前の行末に、送り記号Aを書き加え、そのページの最下部にある旧送り記号Aを横棒で消去する。そして受け手の送り記号も次ページ冒頭の旧送り記号Aを破棄し、テキスト14の最後の行の頭にAを加える。この時点でピュロス王のエピソードとそのコメントの全体が完全にこの断章から姿を消すことになる。

《ピュロス王のエピソードとテキスト15の類似》

テキスト15は10-13-14と議論の内容からもその形式からも類似している。

そこで、まず両テキストの内容の類似する文を、次に議論の形式を比較してみよう。

内容の類似する文の比較

《 ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impétueuse qui les détourne de penser à soi et [...] c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire

avec ardeur》(テキスト15)は《ils cherchent le tumulte, s'ils ne le cherchent que comme un divertissement》(テキスト14)をわかりやすくパラフレーズしたものと言っていいであろう。また《ils le recherchent comme si la possession des choses qu'il recherchent les devait rendre véritablement heureux》(テキスト14)と《ils seront ensuite dans un heureux repos》(テキスト15)は同じコンテキストにあり、親近関係のきわめて強い文章である。

またテキスト13に見られる書きかけて途中で放棄されてしまった文《Ce n'est pas qu'ils n'aient un instinct qui leur fait connaître que le vrai béatitude》は、テキスト15後半に《Car ils ont un instinct secret qui les porte à chercher le divertissement et l'occupation au dehors, qui vient du ressentiment de leurs misères continuelles. Et ils ont un autre instinct secret qui leur fait connaître que le bonheur n'est que dans le repos et non pas dans le tumulte. Et de ces deux instincts contraires il se forme en eux un projet confus qui les porte à tendre au repos par l'agitation et à se figurer toujours que la satisfaction qu'il n'ont point leur arrivera si après avoir surmonté quelques difficultés qu'ils envisagent ils peuvent s'ouvrir par là la porte au repos.》と言う形で、思想的にまとまった形で展開されている。しかしながら、この文章はテキスト14の次の文とも関係があることを指摘したい。《et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme》の一文は、パスカルが自身の人間理解の卓越性を主張し、そこに、読者は著者の思想の独自性の主張をつよく感じる部分なのである。テキスト15ではこのような主張は姿を消すものの、しかし、双方の意見や態度のそれぞれを不完全なものとし(テキスト15前半)、その上で自説を展開するという構造は変わっていないのである。次にこの点をもう少し述べてみよう。

議論の形式の比較

1) テキスト10-13-14の議論の形式について

10-13-14では、ピュロス王の行動と彼の顧問の助言についてパスカルが本断章のテキスト5で記した《L'unique bien des hommes consiste donc à être divertis de penser à leur condition ou par une occupation qui les en détourne (...) par ce qu'on appelle divertissement》という立場から、キネアスの助言を批判し¹¹⁾、ピュロス王の行動を人間が自然にとる行動であり¹²⁾、そのこと自体過ちではないとする。一方ピュロス王に対しても、その行動の目的について間違った考え方をしているとして批判し¹³⁾、テキスト14の最後には《en tout cela et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.》と書き加え、両者とも真の人間性を理解していないと断ずる。

すなわち議論の形式としては、ピュロス王の行動を弁護することによりキネアスの意見を批判し、ピュロス王の行動をその目的において批判する。そのうえで両者とも人間の本性がわかっていないと批判し、言外におのれの人間理解の優越性をおわせている。

2) 15の議論の形式について

つぎに、テキスト15の次の下線部に注意してみよう。

Car quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne saurait les satisfaire, s'ils répondaient comme ils devraient le faire, s'ils y pensaient bien, qu'ils ne recherchent en cela qu'une occupation violente et impétueuse qui les détourne de penser à soi et que c'est pour cela qu'ils se proposent un objet attirant qui les charme et les attire avec ardeur, ils laisseraient leurs adversaires sans repartie

ここでは「彼らが……と非難されたときに、もし……と答えていたら、論敵は反論できなかつたであろう」。彼らとは、人々を指すが、彼らはピュロス王に代表される行動をとる人たちであり、論敵とはキネアスの意見を表明する識者と考えてよいであろう。

引用の続きを読んでみよう。

mais en croyant comme ils font qu'ils seront ensuite dans un heureux repos ils donnent beau à se faire battre¹⁴⁾

「彼らが実際そうしていた(=信じていた)ように……と信じていたので、相手に自分を攻撃するよい口実を与えてしまう。」ここでパスカルは、人々が決定打を打てずに、論敵の思うつぼにはまってしまうと評している。

さらに15後半では、なぜそのようなことになるのか、人間の中に潜んでいる2つの矛盾した本能を用いた説明をしている。このように、人間が「気晴らし(divertissement)」を求める理由を人間の本能、言い換えれば、人間の本性に基づいて説明する。

テキスト15の形式は、以上に述べたように、ピュロス王に代表される行動をとる人たちとキネアスの意見を表明する識者それに語り手の三者からなり、前2者は互いに相手を完全にうち負かすことができない。そして語り手は両者の上に立ち、より高い観点から、説明をするというものである。さらに、説明できると言うことは、人間の真の本性を理解しているからであるという意味において自説の優越性を間接的に主張しているとも言えるのではないか。

テキスト10-13-14では、登場人物はピュロス王とキネアスであり、語り手が双方の考え方を批判して、自説の優越性を主張していた。一方、テキスト15では、ピュロス王とキネアスの対立関係は姿を消し、一般の人々と批判する人との対立関係に置き換えられている。語り手はこの両者より一段高見にいて、両者をともに批判し、さらに、その現象の理由を説明している。いずれのテキストにおいても、三角形にたとえれば、その頂点に語り手が存在するという構図は同じである。

このように、文の内容、議論の形式を比較検討してきた結果、両テキストには強い親近性が見られる。筆者はテキスト15が10-13-14の別バージョンであると考え。すなわち、パスカルはテキストの10-13-14を15に書き換えたと言者は考えるのである。

第2部

第2部では、「テキスト15はテキスト10-13-14の別バージョン」であるという仮説が、草稿上に残された加筆・訂正の多くの痕跡とどのように符合するか考えてみたい。すなわち、草稿上の証拠と齟齬を来さないかを検証していきたい。

作業に入る前に、次のことを確認しておきたい。パスカルの草稿を取り扱う場合、日本のパスカル研究家、故前田陽一氏の発見したルール、すなわちパスカルが原稿を執筆する際に自己に課していたルールに常に照らしていかなければならない。

これについては、前田氏自身の著作や論文もたくさんあり、また、J.メナール氏の『パスカルのパンセ』中にも *L'interprétation des variantes des Pensées par la méthode de double lecture de M. Yoichi Maeda*¹⁵⁾として5ページを割いて紹介されている。また日本語の文献¹⁶⁾で簡単に読むことができ、いまや、『パンセ』草稿研究の常識となっているので、ここで改めてその全容を紹介する必要もないであろう。ここでは、論旨に絡む部分のみ、適宜紹介するにとどめる。

ここではイメージしやすいように、断章「気晴らし」を、3つの部分に分け、テキスト10-13-14をBとし、それ以前の部分をA、テキスト15をB'、それ以降のテキストをCとかりに呼ぶことにしよう。すなわち、草稿にはA、B、B'、Cと4つの部分が順番に存在する。そしてBとB'は同じ役割を持った別のバージョンである。書き換えの過程には2つの可能性がある。すぐに思いつくのが、次の第1の可能性である。

《第1の可能性》

パスカルはA、Bと書きすすんだが、そこで書いたBが気に入らず、Bぜんぶを放棄して、B'、Cと書き進んだ。

しかしこの可能性は草稿上の証拠が否定する。理由を説明しよう。

理由の第1は草稿上のテキスト10の数行に見られる。

prendre le

Le conseil (d) qu'on donnoit a pyrrhus de ~~tiue~~ en repos qu'il alloit

chercher par tant de fatigues, receuoit bien des Difficultez ~~Et ne~~

soit

~~fut pas dig~~ Dire à Vn homme qu'il ~~tiue~~ en repos, C'est luy

dire qu'il Viue heureux, ~~dire a Vn~~ C'est luy conseiller

(テキスト10, 部分)

引用3行目後半から4行目にかけて、《Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux,》(premier jet)と書いているが、後になって読み直しているときに、《vive》を横線で消して、上部行間に《soit》と訂正を加え、《qu'il soit en repos》となおしている。この行間を使った訂正の仕方は、はじめに書いていくとき(初稿執筆時)には行わない方法である。パスカルは自分が多量の加筆・修正を加えることを自覚していて、行間と欄外余白は、時間が経って再びこの文章を取り上げるまで、使用せずに残しておいたのである。筆者はパスカルの草稿を長らく研究しているが、この規則を、我々が考えている以上にはるかに厳格にパスカルは守っていたと思われる。すなわち、この加筆が証拠立てることは、時間がたって、自分のはじめの考えにとらわれないようになってから再度そのテキストを読み直し加筆・修正している時に、このテキスト⑩はまだ生きていたということになる。すなわち初稿執筆時には放棄していない。

もし、第1の可能性のように、パスカルはA、Bと書きすすんだが、そこで書いたBが気に入らず、Bぜんぶを放棄して、B'、Cと書き進んだとすれば、書き上がった初稿にはBは存在しないはずである。したがって、第1の可能性は草稿上の証拠とは矛盾し、否定される。

同じ結論に至る加筆・訂正の例をもう一つ挙げよう。

conseiller d'avoir une condition toutes heureuse et *laquelle* JI puisse
~~considerer~~ ^{a loisir} sans y trouver sujet d'affliction, ~~C'est luy conseil~~
~~Ce n'est donc pas entendre la Nature~~
 aussi les hommes (sen) qui sentent Naturellem^t leur condition ~~reuti~~

(テキスト13, 部分)

この2行目の上部行間に《à loisir》の加筆が見られる。一つ目の修正と同じように、このような行間を使った加筆は、初稿執筆時ではなく、時間がたって、自分のはじめの考えにとらわれないようになってから再度そのテキストを取り上げ、修正を加えるときなのである。加筆修正時に、このテキストはまだ放棄されていなかったということになる。もし、第1の可能性のようにパスカルはA、Bと書きすすんだが、そこで書いたBが気に入らず、Bぜんぶを放棄して、B'、Cと書き進んだとすれば、書き上がった初稿にはBは存在しないはずである。逆に、再稿時にこのテキストが生きていることが事実であるから、第1の可能性は成り立たない。そのことを草稿ははっきりと証言している。

《第2の可能性》

第1の可能性において、Bを書き、それをすぐに放棄してB'へと書き換えたと考えるところに無理がある。初稿執筆時にB'を書いたと考えるとどうしても初稿時にBを放棄したと判断しなくてはならない。これは草稿上の証拠が否定するところである。そこでB'を初稿時に

書いたのではなく、再稿時以後に書いたと考えてみよう。B'が初稿時に存在しないとすれば、Cも存在しない。すなわち、この文章は初稿成立時にはA Bだけであったと考えるべきである。

図式化しておこう。

- ① 初稿時 : A, B
- ② 最初の初稿加筆時 : A, Bに加筆
- ③ 第3段階 : A, B' (B放棄, B'に書き換える)

①と②のステップには時間差がある。これはパスカルが原稿執筆時に守っていたルールで明らかである。②と③は、②のステップが完了して、③のステップに入ったのであるが、②のステップの最後の行為¹⁷⁾に引き続いて、③のステップが開始されるので、②、③が連続して行われた可能性が高いと筆者は考えている。

さて、まずBのテキスト(10-13-14)をその成立の時点での状態で見よう。このためには、故前田陽一氏の発見したルールにそって、草稿の余白と行間に見られる加筆をすべてとばして読んでいく。こうして、次のテキストが得られる。なお、ここでは初稿執筆時に書いてすぐに消されたもの、棒線で消された跡も再現し、初稿時に状態を再現する。

テキスト10

~~on philosophe sottom^t en disant que les Roys ne sont pas
heureux par ce que les Choses qu'ils possèdent ne
Le conseil qu'on donnoit a pyrrhus de uire en repos qu'il alloit
chercher par tant de fatigues, receuoit bien des Diffictez Et ne
fut pas dig~~ Dire à Vn homme qu'il uiue en repos, C est luy
dire qu'il Viue heureux, ~~dire a Vn~~ C est luy conseiller

A

(210ページの最下段)

(209ページ上段)

テキスト13-14

A conseiller d'auoir une condition toutes heureuse et *la quelle* JI puisse
considerer sans y trouuer sujet d'affliction. C est luy consei-
Ce n'est donc pas entendre la Nature-
aussi les hommes (sen) qui sentent Naturellem^t leur condition ~~n eui~~
n euitent rien tant que le repos, JI n'y a rien qu'ils ne fassent p^r chercher
le trouble, ~~ce n'est pas qu'ils n'ayent Vn Jn~~ instinct qui leur
fait connoistre que le Vraye beatitude

Ainsi on se prend mal pour les blâmer mais on a quelque raison en ce que
 Les hommes eux leur faute n'est pas en ce qu'ils recherchent (de) le
 Diuertissement empesch Et le tumulte s'ils ne le cherchent que comme
 Vn diuertissement mais le mal est qu'ils ne le recherchent comme si
 La possession Des choses qu'ils recherchent les deuoit rendre veritablement heureux
 Et c'est en quoy on a raison d'accuser leur recherche de uanité de sorte
 qu'en tout cela et ceus qui blâment et ceus qui sont blâmes n'entendent
 La Veritable nature de l'homme.

テキスト14はパスカル以外の人によって、書き取られたものである。左余白に、このテキストを書き取った同じ人の手で《La possession》と追加の書き込みがある。これは書き取らせるとき正確に書き取れたのかを確かめるために、書き取った本文を音読させてパスカルが確認したことを物語っている。

《La possession》を《Des choses qu'ils recherche …》の行の頭に書き込んだこの方法はパスカルの普段実行していたものと同じなので、この点から、書き取った人物も普段パスカルが実行している執筆の方法をそばで見えて知っていたと想像することが許されそうである。

なぜ、パスカルはこの部分を人に書き取らせたのであろうか。所詮想像の域を出ないが、しかし、パスカルほど文章にこだわる人物がわけもなく他人に書き取りを依頼するであろうか。むしろ、何らかの理由で、自分ではもはや書くことができず、書き取ってもらうことを頼まざるを得ない状況に陥ったからではないだろうか。「人間の悲惨」というタイトルのもとに、分量にしてすでに2枚をインクで埋め3枚目に至ったパスカルが、自分では筆を執れなくなった。それでも、他人の手をわずらわせても書き終えてしまいたいほどのこと、それをパスカルは書き取らせたのではないだろうか。おそらく、そこまで書けば、考えていることが一段落付くとか、あるいは、そこまで書けば、当面考えていたことを書き終えるか、いずれにしても、草稿を調べる限り、誰もがこのように考えたくなりはしないだろうか。こういった問題も一度じっくりと検討する必要があるであろう。

放棄のプロセス

それでは、この最初の状態のテキストが、どのような経緯で本断章の全体から切り離され放棄されてしまうことになったのであろうか。

テキスト14の最後の行に注目しよう。パスカル以外の手で《La Veritable nature de l'homme.》と書かれている。この次に、今度はパスカルの手で《Car》と記され、このすべてが一本の横線で放棄されている。《La Veritable nature de l'homme.》はその前の行の最後の単語《n'entendent》の直接目的語である。《La Veritable nature de l'homme.》は放棄されているにもかかわらず、

目的語を補っていない。すなわち、パスカルはこの行に自らの手で《 Car 》と書いてその理由を述べ始めようとしたときに、《 Car 》とともに《 La Veritable nature de l'homme. 》を横線で放棄したのである。これに続いて、縦線⑩でテキスト14全体を放棄。さらにテキスト13の後半を縦線⑧によって放棄。ついで縦線⑤でテキスト13の全体を放棄。パスカルはそこでテキスト13, 14を一気に縦線④ですべて放棄したことを明確にする。

先に検討したようにテキスト13を放棄するということは、前ページのテキスト10の縦線群③で放棄されているテキストも同時に放棄することを意味しているので、テキスト13, 14の放棄が完成したところで、210ページに戻ってテキスト10の最下行2行を縦線4本(③)で放棄する¹⁸⁾。

以上でピュロス王のエピソードとそのコメントはほぼすべて放棄されたことになるが、書き出しの2行は生きている。その2行も不要である。テキスト9の最後に送り元記号Aを付け、このページの最下段に付けてある送り元記号Aを放棄。そして、209ページのテキスト14の最下行頭に送り先記号Aを付け、同ページの最上段にある送り先記号Aを放棄する。こうして、ピュロス王のエピソードとそのコメントは完全に放棄されることになり、この文章から姿を消すことになる。そして、ここではじめて、そのかわりのテキスト15が書き始められるのである。

これでテキスト10, 13, 14, 15に関係する草稿上の手がかりをほぼすべて使って、これらのテキストの放棄の有様を合理的に再現することができたと信じる。

テキスト10, 13, 14(ピュロス王のエピソードとそのコメント)をテキスト15に書き換えて何が変わったのであろうか、最後にこの点を考えて、小論を終わろう。

テキスト14に見られる《 ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme 》と言う言い方は、両者とも人間の真の本性を理解していないという攻撃的、挑戦的、あえて言う、「私」のみが理解しているという「自己愛(amour propre)」を言外に感じさせる言い方である¹⁹⁾。

他方、書き直されたテキスト15の表現は、分析的で、客観的で、いわば、科学者の表現になっており、論理的で難しい文章にはなっているが、理解しやすいものになっている。

なぜ、テキスト10-13-14を放棄したのであろうか。ひとつには、すでに説明したこの文章に露骨に表現されている自己愛、自己顕示欲と言ったものをそぎ落とすためであったろう。しかしそれだけでは説明できない。むしろ、ピュロス王のエピソードの使用法に問題が潜んでいないであろうか。

17世紀において、王は市民、平民、あるいは貴族とは、全く違う存在である。その王、たとえ歴史上の人物であれ、王の行為を普通の人間の営みの例として用いることに、はたして説得力はあるだろうか。パスカルはこの点に疑いを抱いたのではないか。すなわち、この例に対する読者の共感に戦略的視点から弱さを感じたからではないだろうか。さらに、今後の断章「気

晴らし」の研究を先取りして言ってしまうと、本断章の初稿は《*Misère de l'homme*》²⁰⁾というタイトルのもとに書かれたテキスト10-13-14までの文章である。このテキスト10-13-14を放棄してこの部分をテキスト15に書き直し、さらに、書き続けてできたのが第2稿である。テキスト10-13-14を放棄した理由は、初稿と第2稿との比較でいっそうははっきりするであろう。

『パンセ』断章「気晴らし」の草稿上2ページにわたる放棄について、これまで研究者の誰も指摘していないこれらのことがらを考えると、この断章の草稿はまだ未解読と言っているのではないか。断章「気晴らし」の草稿の徹底した研究は、この難解とされる断章解読の鍵になるのではないだろうか。

この草稿成立の全容を解明する必要性を、筆者はつよく感じるのである。

注

- 1) 拙論「《*Misère de l'homme*》から《*Divertissement*》へ」(『仏文研究』vol. VIII, 1974)において、13行で書かれている部分を今回徹底的に調べて、本論文に仕立てた。昔の不勉強を反省する機会となった。なお、Michel Le Guern は、1966年に、本断章の成立について論文を発表している。しかし、当時前田氏が、すでに氏の草稿研究法(複読法)について論文を世に出しているにもかかわらず、Le Guern 氏の草稿研究において、氏は複読法をまったく参考にしないばかりか、その後、前田氏自身がソルボンヌ大学でこの研究を1年間にわたり講義し、フランスでもこの方法が普及し、おおくのフランス人のパスカル研究者がこの方法を学び、それでもって草稿を研究しており、いまやパスカル研究の常識となっているにもかかわらず、氏の最新版(2000年出版)のパスカル全集中でも、本断章に付けた注で1966年から一歩も進歩していない。言うまでもなく、本断章の成立過程について、全く理解していないので、ここで取り上げる必要のある指摘はない。
- 2) 『パンセ』本文の校訂版を複数出版し、フランス本国のパスカル研究の権威。セリエ氏はいくつか出版しているので、代表的な『パンセ』校訂版を挙げておく。
Blaise Pascal, *Pensées*, Mercure de France 1976
Blaise Pascal, *Pensées*, Classiques Garnier, Bordas, 1991
- 3) 筆者は半年に一度パリに行き、セリエ教授に断章「気晴らし」の草稿研究の進展を報告・討論し、指導を受けている。
- 4) 草稿には、タイトルとして、まず“*Misère de l'homme*”と記されているが、これを訂正して“*Divertissement*”と改めている。
- 5) 断章「気晴らし」からの本文中のフランス語の引用には、パスカルの記した綴りのまま、現代の正書法によるものの2通りがある。主として・は草稿上の問題を指摘する場合であり、本文中で意味が重要な場合は・の方式で引用しているが、いちいち、そのことは断らない。また、一部パスカルが他人に書き取らせた部分があるが、このテキストはゴチック体で区別している。また、加筆部分はイタリックを使用するなど添付の草稿のコピーの凡例に準拠している。
- 6) 番号付けは、添付の草稿活字コピー(Copie figurée)上に記した。なお、草稿第1ページは言及されないで、草稿2、3ページのみ添付してあるが、テキストの番号は通して付けてあるので、6から始まる。
- 7) 注17を参照
- 8) p. 267 in *Les Essais de Michel de Montaigne* par Pierre Villey P.U.F. 1965

- 9) Plutarque, *Les Vies des hommes illustres*, Traduction de Jaques Amyot, in Pléiade, 1951, Gallimard
- 10) 『パンセ』の第1写本 : La Première Copie des Pensées, Bibliothèque Nationale, fonds français, no.9203
『パンセ』の第2写本 : La Seconde Copie des Pensées les pièces reliées avec elle, Bibliothèque Nationale, fonds français, no.12449
- 11) 《Dire à un homme qu'il vive en repos, c'est lui dire qu'il vive heureux ; c'est lui conseiller d'avoir une condition toute heureuse et qu'il puisse considérer, sans y trouver sujet d'affliction.》(テキスト 10, 13)
- 12) 《les hommes qui sentent naturellement leur condition n'évitent rien tant que le repos, il n'y a rien qu'ils ne fassent pour chercher le trouble.》(テキスト 13)
- 13) 《ils le recherchent comme si la possession des choses qu'ils recherchent les devait rendre véritablement heureux》(テキスト 14)
- 14) 《donner beau》は今日ほとんど使用されない熟語で、《jeu de paume (テニスの原型とされる球技)》の用語。相手が拾うのにやさしいボールを打つこと、転じて、相手にとって都合のよい機会を与えること。(リトレ)
- 15) pp. 371–375, in Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, S.E.D.E.S, Paris, 1976
- 16) もっともまとまっているものは, pp.189–243 in 『パスカルの「パンセ」注解』第1, 岩波書店, 1980
- 17) あとで説明することになるが, パスカルはBの最終行の続きに, まず自身の手で“Car”と書いて, そこで最終行を“Car”まで横線①で一気に放棄する。
- 18) 《横線①と縦線②によるテキストの放棄》の項で「縦線群②による放棄は直ちに行われたものと思われるが, この理由はあとで述べる。」と問題を先送りにしたが, ここでテキスト 10 の 2 本の縦線②について述べておく。もし, 縦線②が引かれてなかったとして, テキスト 13, 14 を一気に縦線④ですべて放棄したした際に, 縦線②が引かれたと仮定してみよう。パスカルは縦線④を引いたあとに, 前ページ最下部テキスト 10 のテキスト 2 行文も同時に縦棒線群③で放棄するのであるが, このときに, テキスト 10 すべてに縦線を引いてしまうこともできたはずである。なぜなら, 縦線群③を引いたあとに, パスカルがすぐに実行することは, 送り記号Aの接続変えによるテキスト 10 全体を含むピュロス王のエピソード全体の放棄だからである。
パスカルは縦線②がすでに引いてあるからこそ, 下 2 行を縦線③で放棄する。このときの意識はこの 2 枚の紙にまたがる文を放棄することにあると推定できる。
結果として草稿上には横線, 縦線のいずれによっても放棄されていない完全な文“Le conseil (d) qu'on donnoit a pyrrhus de (uiure en) prendre le repos qu'il alloit chercher par tant de fatigues, receuoit bien des Difficultez》が残っている。しかしこれは本文中にも述べたように, 送り記号Aの接続変えによってピュロス王のエピソード全体の放棄がなされている以上, この断章の本文ではないはずである。しかるに, こういった事情はこうにしてテキストを解説した場合のみに了解されることである。多くの版が, この 1 文を断章「気晴らし」の本文中に組み込んでいるため, 断章「気晴らし」は読みにくいものになっている。
- 19) パスカルは, 読み直したときにこのことを自覚して, 欄外に, 《La vanité, le plaisir de le montrer aux autres》とおのれを戒める自己批判を書き込んでいる。この短い書き込みは決して他人に向けた言葉ではなく, テキスト 10–13–14 の放棄の際に, 自分に向けて書きこんだ言葉と思われるが, こういった事情はこうにしてテキストを解説した場合のみに了解されることである。多くの版がいかにも箴言調のこの自戒の言葉を, 『パンセ』本文に, 多くは断章「気晴らし」の本文中に組み込んでいるため, 読者はこのことであっそう悩まされることになり, 結果として, 断章「気晴らし」は読みにくいものになっている。

参考文献

A. Manuscrits :

1. Bibliothèque Nationale, ms. fonds fr. 9202 (Recueil original)
2. B.N., ms. fonds fr. 9203 (Première copie)

3. B.N., ms. fonds fr. 12449 (Seconde copie)
- B. Fac-similés : Original des Pensées de Pascal. Fac-similé du manuscrit 9202 de la B.N. Texte imprimé en regard et notes par Léon Brunschvicg, Hachette, 1905.
Discours de la condition de l'homme, ce qui reste du ms, en reproduction phototypique et restitution par P.-L. Couchoud, Albin Michel, 1948.
- C. Éditions :
- "Les Pensées de Pascal", éd. Port-Royal, 1678, Guillaume Desprez.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Condorcet, 1776, Londres.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Bossut, 1779, Detune (Œuvres, t. II)
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Faugère, 1844, Andrieux.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Havet, 1852, Dezobry et Magdeleine.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Molinier, 1877-79, Alphonse Lemerre.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Michaut, 1896, Librairie de l'Université
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Brunschvicg, 1904, Hachette.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Chevalier, 1926, Gabalda.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Strowski, 1931, Ollendorff (Œuvres complètes)
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Dedieu, 1937, Librairie l'École.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Tourneur, 1942, Vrin.
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Lafuma, 1951, Ed., du Luxembourg
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Chevalier, 1954, Pléiade, Gallimard
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Tourneur-Anzieu, 1960, Ed. de Cluny
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Lafuma, 1963, Seuil (Œuvres complètes)
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Descotes, 1973, Garnier-Flammarion
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Sellier, 1976, Mercure de France
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Sellier, 1991, Classiques Garnier
 - "Les Pensées de Pascal", éd. Le Guern, 2000, Pléiade, Gallimard
- D. Divertissement に関する論文
- Michel Le Guern, Pascal au travail, La composition du fragment sur le Divertissement, in REVUE DE L'UNIVERSITE D'OTTAWA, vol. XXXVI, no. 2, 1966
 - 湊野正満 《Misère de l'homme》から 《Divertissement》へ in 仏文研究, vol. VIII, 1974
- E. 『パンセ』草稿の複読法に関するもの
- Yoichi MAEDA, *Le premier jet du fragment pascalien sur les deux Infinis*, in Études de langue et littérature françaises, No.4 白水社, 1964 (1965年に Société des Amis de Montaigne の Bulletin 1-3月号に再掲載されている)
 - Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, S.E.D.E.S, Paris, 1976
 - 前田陽一 『パスカル「パンセ」注解』第1巻, 岩波書店, 1980

The retouches and the lines given up at the pages 210 & 209 of the Album of Pascal's handwriting manuscript of "Pensées"

—— To reveal the secret of the birth on the fragment "Divertissement" ——

Masamitsu HORINO

Abstract

At the second & third leaves of Pascal's autograph manuscript of the fragment "Divertissement" (in the "Pensées" of Blaise Pascal), we find not a few lines covered with many corrections. In this paper, we will study these two pages, above all the lines that begin with the words "on philosophe sottement (R.O. p.210)" to the words "ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme." (R.O. p. 209). They were all abandoned finally, but contain more than 20 lines on the episode of the advice that one gave to the King Pyrrhus. Why did Pascal give up these lines so long and so important? If one sees next lines and if he compares them with those given up, he find in the two parts, the same ideas, the same purpose and the same logical structure, that's why we come to a conclusion that Pascal replaced these lines with those. And then we just find the possibility where we will be able to discover under the text named "Divertissement" a really new text that Pascal had once written and given up. A really new text which no one can see nor read might be written under the title of "Misère de l'homme" which was crossed out in the manuscript to write a new title "Divertissement".

We insist on the importance of studying the manuscript of the fragment of "Divertissement" to discover the new text and a new steps of the study of Pascal' "Pensées"

Keywords : "Pensées" ; "Divertissement" ; autograph manuscript ; "Double lecture" of M. Yoichi MAEDA (named by Pr. Jean Mesnard)

断章「気晴らし」(fr. 168-136)

写真版及び Copies figurées

R. O. pp. 210. 209

『パンセ』草稿転写凡例

パスカルは自分のために編み出した原稿の推敲法を守って文章を書いていた。初稿執筆時には用紙の上下と左右の片側（場合によると両側）に余白をとり、また行間も1行分あげ（ダブルスペース、一行おき）、この余白をまったく使わずに、はじめに頭の中にあつた考えを全部書いてしまう。普通の人間は、ここで見直して加筆訂正するが、パスカルは、書いたばかりの文章をかなりの間見ないでしまつておいて、自分の頭からはじめの考えが完全に消えてしまったのち、ふたたび取り上げ、修正の手を加える。この時には、空いている用紙の上下左右の余白、行間をフルに使って徹底的に修正する。「パスカルはこのような方針を組織的に厳格に適用した」という。

1) 綴りは現代の正書法に改めず、パスカルの記した綴りを尊重した。現代のものと著しく異なるものであつても、それをいちいち断わることはしなかつた。

なお、209ページテキスト14に見られる *chercheint* は、書き取つた人物の書き間違い

2) 大文字、小文字の使用はパスカルのそれに準じた。

3) パスカルの綴りのすべてを書かず、語尾を跳ね上げるなど、いわば略号のようなものを使用する場面があるが、これは、パスカルの草稿研究の慣例に従つて表記した。

4) ここでは用紙の大部分を使って1行おきにかかれていた部分は通常の文字で、これに加筆されているテキストはイタリックで区別した。

このイタリックの文字に行間に更に加筆があるが、これは一回り小さいイタリックの文字で印刷され、区別されている。

例 *grandeur de nostre premiere*
qui reste de la , nature

また、209ページのテキスト14に存在する他人の手で書かれたものは、ゴチック体の活字で区別する。例 **Ainsi on se prend mal pour les blasmer**

5) 上下左右の余白にあるテキストは、加筆されたものであり、イタリックで印刷されている。

6) 横線で放棄されている文字については、書いてすぐに放棄されたものはその文字をかき括弧 [] で、

また時を改めて加筆修正しながら放棄されたものはその文字を中括弧 | | でくり区別した。ただしパラグラフ全体を縦線などで放棄しているような場合は、そのまま縦線などで示した。

7) 一度書いた文字の上にそのまま他の文字を重ねて書いた場合、はじめに書いた文字をカッコ () に入れ、重ねられている文字をそのあとにスペースを置かずに記した。

8) なんらかの理由で筆者が補つたものは [] の括弧でそれを区別している。

9) 活字転写版 (Copie figurée) には、本文理解を助けるために反転文字で **Texte15** のように、テキストの番号を付加してある。断るまでもないが、これは筆者が追加したものである。

自筆の草稿を活字に転写するにあたり、次の写真版、写本と刊本を参照したが、その異同をいちいち記すことは煩雑になりすぎるのでしなかつた。

I 断章「気晴らし」の自筆の草稿写真集

1) Original des Pensées de Pascal, Fac-Simile du Manuscrit 9202 (fonds français) de la Bibliothèque Nationale (Bibliothèque Nationale 作成の Microfilm)

2) Brunschwig : Original des Pensées de Pascal, Fac-Simile du Manuscrit 9202 (fonds français) de la Bibliothèque Nationale [臨川書店の複製版]

3) Couchoud : Discours de la Condition de l'homme

II 断章「気晴らし」の写本 [いずれも Bibliothèque Nationale 作成の Microfilm]

1) La Première Copie des Pensées, Bibliothèque Nationale, fonds français no.9203

2) La Seconde Copie des Pensées les pièces reliées avec elle, Bibliothèque Nationale, fonds français no.12449

III 『パンセ』刊本

1) P. Faugère : Pensées, Fragments et Lettres de Blaise Pascal, Paris, Andrieux, 1844

2) A. Molinier : Les Pensées de Blaise Pascal, Paris, Alphonse Lemerre, 1877

3) G. Michaut : Les Pensées de Pascal, Fribourg, Librairie de L'Université, 1896

4) Brunschwig : Pensées de Blaise Pascal, Paris, Hachette, 1904

5) Tourneur : Pensées de Blaise Pascal, Edition Paléographique, Paris, Vrin, 1942

6) Tourneur, Anzieu : Blaise Pascal Pensées, Paris Almand Colin, 1960

7) Sellier : Pascal Pensées, (Edition Classique Garnier) Paris, Bordas, 1991

(+++)

Texte6

a leur condition ou par une occupation qui les en détourne, ou par quelque passion agréable (qui) Et nouvelle qui les occupe, ou (le) par le Jeu, la [danse] chasse quelque spectacle attachant, Et enfin par ce qu'on appelle diuertissem^t | | Et de la Vient |

+++

De la Vient que le Jeu (e)(l)la Conuersation des femmes, la guerre, les grands employs sont

si recherchez, Ce n'est pas qu'Jl y ayt en effect du bonheur, ni qu'on

Texte11

Raison
pour quoy on
ayme mieux la
chasse que la prise

s'Jmagine que le Vray (s)beatitude soit d auoir l'argent qu'on peut gagner

au Jeu, [en auroit pas] ou [dans le Cere] dans le lieure qu'on court,

ce n'est pas cet Visage mol et paisible

on en voudroit pas s'Jl estoit offert | ce n'est pas Cette possession languissante |

Et qui nous laisse penser a nostre malheureuse condition qu'on recherche

ni les dangers de la guerre ni la peine des employs, mais c'est

le tracas qui n^s detourne d'y penser Et n^s diuertit.

Texte8

De la Vient que les hommes ayment tant le bruit et le remuem^t

De la Vient que la prison [Et la solitu] est [si h] Vne supplice si horrib^e, de la

uient que (a)e (sol)plaisir de la solitude Est Vne chose Incompréhensible

Et c'est enfin le plus grand sujet d'(u)e [bon] felicité de la Condition des

Royes de ce qu'on essaye sans cesse a les diuertir Et a leur procurer (les)toutes

sortes de plaisirs

Texte9

Voila tout ce que les hommes ont pu Jnuenter p^r se rendre heureux

Texte12

le Roy est enuironné
de gens qui ne
pensent qu'a
diuertir le Roy
et a l'empescher de
penser a luy
Car Il est malheureux
tout roy qu'il est
s'il y pense

Et ceux qui font sur cela les philosophes Et qui [mesprisent]

croient que le monde est bien peu raisonnable de passer tout le jour

a courir aprez Vn lieure qu'Jls ne Voudroyent pas auoir

acheté, ne connoissent guere nostre nature. Ce lieure ne

n^s garantiroit pas de la ueue de la mort Et des miseres qui n^s

detournent, mais la Chasse n^s [empes] en garantit. Et Ainsy A

Texte10

[on philosophe s'ottem^t en disant que les Royes ne sont pas]

[heureux par ce que les Choses qu'Jls possèdent ne]

prendre le

Le conseil (d)qu'on donnoit a pyrrhus de | uiure en | repos qu'Jl alloit

chercher par tant de fatigues, receuoit bien des Difficultez [Et ne]

soit

[fut pas dig] Dire à Vn homme qu'Jl | uiue | en repds, C'est luy

dire qu'Jl Viue heureux, [dire] a Vn C'est luy consëiller

(A)

(A)

Texte19

La Vanité
Le plaisir de
le monstrier aux
autres

Texte13

conseiller d auoir une condition toutes heureuse et laquelle JI puisse
considerer ^a *loisir* sans y trouver sujet d affliction, [C est luy conseil]
[Ce n est donc pas entendre la Nature]
aussi les hommes (sen)qui sentent Naturellem^t leur condition [n eui]
n eurent rien tant que le repos, JI n y a rien qu JIs ne fassent p^r chercher
le trouble, [ce n est pas qu JIs n ayent Vn Instinct qui leur]
[fait connoistré que le Vraye beatitude]

Texte14

Ainsion se prend mal pour les blâmer [mais on a quelque raison en ce que]

[Les hommes eux] leur faute n'est pas en ce qu'ils recherchent [(de)le]

[Diuertissement] [empesch] [Et] le tumulte s ils ne le chercheint que comme

Vn diuertissement mais le mal est qu ils [ne] le recherchent comme si

La possession Des choses qu'ils recherchent les deuoit rendre veritablement heureux

Et c est en quoy on a raison d accuser leur recherche de uanité de sorte

qu'en iout cela et ceus qui blasment et ceus qui sont blasmes n'entendent

Texte15 Et Ainsy

{ La Veritable nature de l'homme Car } quand on leur reproche qu JIs

Texte20

La dance
JIs faut bien
penser ou
I on mettra
ses pieds

Texte21

le Gentilhomme
croit sincerem^t
que la chasse est
Vn plaisir grand Et
Vn plaisir royal
mais son piqueur n est pas
de ce sentim^t la

Texte22

ne se connoissent pas eux mesmes, JIs
++s imaginent qu JIs
auoyent obtenu cette
charge, JIs se reposeroient
ensuite avec plaisir
Et ne sentent pas que
la nature Insatiable de
la Cupidité, JIs croyent
chercher sinserem^t le
repos Et ne cherchent
en effect que l agitation

Texte16

ne se connoissent pas eux mesmes, JIs

++s imaginent qu JIs
auoyent obtenu cette
charge, JIs se reposeroient
ensuite avec plaisir
Et ne sentent pas que
la nature Insatiable de
la Cupidité, JIs croyent
chercher sinserem^t le
repos Et ne cherchent
en effect que l agitation

Car

+++ ou I on pense aux
miseres qu on a ou à celles
qui nous menacent Et quand
on se uerroit mesme assez
a l abry de toutes parts l ennuy
de son autorité priué ne
laisseroit pas de sortir du fond du
Cœur ou JI a des racines
naturelles, Et de remplir l esprit
de son Venin.

Texte23

par l agitation, Et a se figurer toujours que la satisfaction qu JIs
n ont point leur arriuera si | apres auoir | surmont(é)ant quelques difficultez
qu JIs (s)Enuisagent JIs peuuent s ouuir par la porte au repos.

Texte17

Ainsy s ecoule (d)toutes la uie, on cherche le repos en combattant quelques

obstacles Et si on les a surmontez le repos deuiet Insupportable Et

par l ennuy qu JI engendre, JIs en faut sortir Et mandier le tumulte

Texte18

[Nous] | Nulle Condition n est heureuse sans bruit Et sans diuertissem^t Et |
| toute Condition est heureuse tandis qu on (a)Jouit de quelque diuertissem^t |
+ mais qu qn Juge quel est ce bonheur qui consiste a estre diuertit de penser a soy

B